



私は生まれつき耳が聞こえません。1歳半の時に違和感を覚えた母が病院に連れて行き、耳が聞こえていないことが発覚しました。当時は、手話が禁止されていたため、母が必死に発音訓練をしてくれました。でも、耳が聞こえないから正しい音が分からないんですよね。顔の前にティッシュを持って声を発し、ティッシュが揺れる発音が“さ行”であるように、物を使って発音方法や口の形を覚えしました。1つ発音できるようになるまでに1～2カ月かかり、とても辛かったです。

社会に出たときに困らないようにと、保育園から中学校までは普通の学校に通いました。同級生は私の耳が聞こえないことを理解し、ゆっくり話してくれたので、そこまで大変な思いはしませんでした。ただ、その時は口話しかできなかったのも、「ふとん」と「うどん」など、似た音の単語を識別するのがとても大変でした。

高校は名古屋ろう学校に通いましたが、同級生は中学校までもろう学校に通っていた子ばかりだったので、みんな手話ができました。同じ仲間なんだから、私も同じように手話で話したいと思い、勉強を始めました。手話は手の動きのほかに表情で喜怒哀楽も表現できるので、手話でコミュニケーションをとるのがすごく楽しくて、手話を使えるようになってよかったと思います。手話がなかったら、暗い人になっていたかもしれません。だから、私にとって手話は笑顔になるためのツールでもあります。

昔に比べると、生活しやすくなったと感じます。以前は聞こえないというと、無視をされたり、1歩引いちゃうような人もいましたが、今は優しく筆談してくれたり、なんとかジェスチャーで伝えようとしてくれます。でも、必ずしもスムーズに意思疎通ができるわけではありません。だから、ほんのちょっとした単語だけでもいいから、手話を覚えてもらえたらうれしいです。そしてゆくゆくは、いつでもどこでも手話でコミュニケーションがとれる、そんな社会になるといいなと思います。

手話奉仕員
養成講座の
講師も務める



※このインタビューは、手話通訳者を介し、手話で行いました。